

湊吉正先生退官記念号の刊行に寄せて

桑 原 隆

本誌『人文科教育研究』の創刊は、昭和50（1975）年11月で、本号は第22号である。湊吉正先生は、今年（平成7年）3月停年退官を迎えられたが、東京教育大学・筑波大学に23年間勤続された。したがって、本誌の創刊からの継続的な刊行期間と、先生が勤続された期間とは、ほぼ歴史的時間を同じくしている。

湊吉正先生は、福岡県飯塚市のお生まれ（昭和6年11月17日）で、約1年後に東京に移られている。日比谷高等学校を卒業後、昭和25年4月、東京教育大学文学部文学科に入学され、言語学を専攻された。先生は中学3年生のとき、『国木田独歩作品集』と出会い、それが「わたしにとって決定的な文学開眼の体験となった」と語られている。私の憶測であるが、言語学を専攻され、言葉や言語の世界の探究に先生を駆り立てた背後には、若き少年時代のこの体験が大きな原点となっているのではないかと思われる。

大学を卒業後、東京教育大学文学部助手、NHK放送文化研究所員、千葉大学教育学部講師・助教授を経て、昭和47年4月より東京教育大学教育学部助教授に就任された。さらに昭和51年4月からは、筑波大学教育学系助教授・教授として、23年間にわたり東京教育大学・筑波大学において活躍されてきた。すでに一昔前の話になるが、筑波移転の折には、まだ交通機関が確立していない不便な泥まみれの筑波の地に、千葉県八千代市より数時間かけて週に何回も足を運ばれ、様々なルール作りに尽力された。とりわけ、筑波大学において新しく発足することになった、大学院の教育研究科修士課程の設立準備やその運営には多大な貢献をされた。平成2年の4月からは、3年間にわたり、大学院博士課程の教育学研究科の科長として、平成5年の4月からは、2年間附属小学校の校長として活躍され、筑波大学の発展に寄与されてきた。

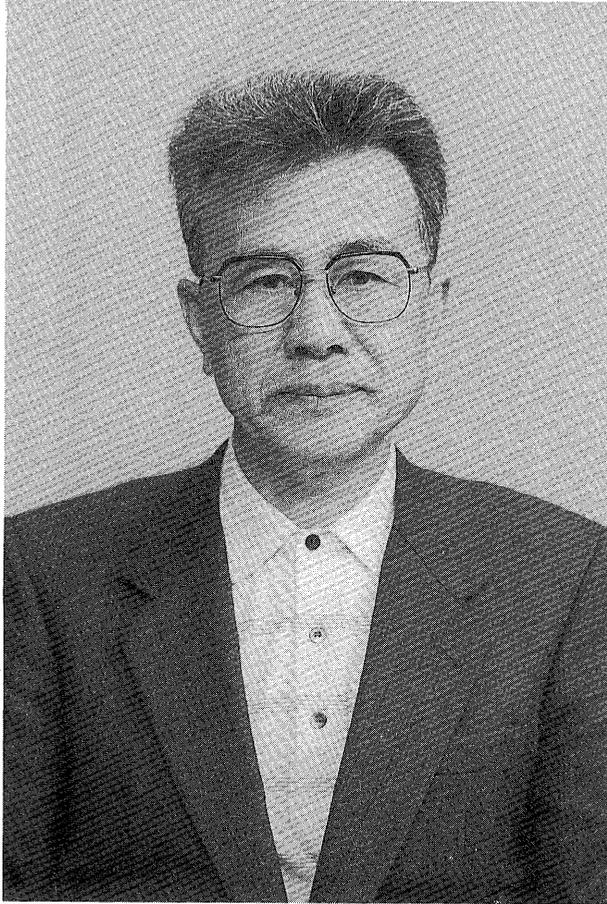
先生の研究や講義は言語学、とりわけフランス系のソシュール、バイイ、ヴァンベニスト等の言語理論を基盤とした言語教育論・国語教育論で、何よりもそこに大きな特徴がある。日本の国語教育界にあって、このような言語論を基盤とした国語教育論を展開できる研究者は少なく、先生の研究は日本の国語教育研究の発展に多大な貢献をされてきている。受講生には難解で深遠というのが定評である。昭和62年4月には、『国語教育新論』を刊行され、翌年の8月全国大学国語教育学会において石井賞を受賞された。また、平成4年11月に、大村はま国語教室の会より、大村はま賞を受賞され、さらに平成6年8月には、日本読書学会より、読書科学賞を受けられた。いずれも荣誉ある賞で、先生の優れた研究やご活躍の軌跡の証左である。この間、日本読書学会の会長を務められ、現在は全国大学国語教育学会の理事長として、社会的な学会活動にも尽力されてきている。

東京教育大学・筑波大学で教えられた学部学生，大学院生，研究生も相当な数にのぼっている。教えを受けた人たちは，主として教育界で活躍し，研究生に関しては，都道府県の教育界の重要な立場において活躍し，現在もその手腕を発揮されている方々の数も数え切れない。湊研究室を卒業した大学院生も，日本の内外にあって，大学等の機関において研究者として活躍している。本誌『人文科教育研究』の創刊号の執筆者は有沢俊太郎，川口幸宏，金英子，小谷悠起子，首藤久義，新名主健一，常木正則，横田勉，塚田泰彦の諸氏で，これらの方々は学年を越えて，湊研究室の第一期集団ともいっていい方であり，いずれも大学の教官として研究と教育に活躍されている。その後も筑波大学において，博士課程および修士課程において，優れた研究者や実践家が湊研究室から輩出されてきている。とりわけ，本学会の機関誌『人文科教育研究』を通じて，研究方法を身につけ，互いに研鑽し，研究者として自立していった会員の数も多く，湊先生の指導のもとでこの機関誌が果たしてきた役割には実に大きなものがある。本学会においては，湊先生は長らく会長として研究会の運営や機関誌の刊行に当たられてきた。先生の真摯で地道な，継続的な機関誌の編集，刊行に対して，心より感謝申し上げる次第である。

湊吉正先生が，ご健康で，ますますご活躍されることを，祈念申し上げるとともに，本学会および本誌『人文科教育研究』に対しても，これまでと変わらぬご指導，ご援助をお願い申し上げたい。

本誌22号は，本学会の会員として湊先生にご指導いただいた者が中心となり，退官記念号として企画した。記念号としての企画にご協力くださった会員，論考を寄せてくださった会員，論文の審査をしてくださった会員，企画から原稿の依頼や整理等を精力的に行ってくれた塚田泰彦氏および大学院生に，厚くお礼申し上げたい。

平成7年4月



湊 吉正 先生

経 歴 等

- 昭和6年11月17日 福岡県飯塚市にて出生（生後約1年で東京市京橋区内に移住。現在、本籍地は東京都）
- 昭和13年4月 東京府東京市京橋区立明正小学校入学
- 昭和19年3月 東京都京橋区〈現中央区〉立明正国民学校卒業
- 昭和19年4月 明治学院中学部入学
- 昭和20年4月 岐阜市立中学校2年転入学
- 昭和23年4月 学制改革により岐阜市立高等学校〈現岐阜県立岐阜北高校〉2年編入学
- 昭和24年4月 東京都立日比谷高等学校3年転入学
- 昭和25年3月 東京都立日比谷高等学校卒業
- 昭和25年4月 東京教育大学文学部入学
- 昭和29年3月 東京教育大学文学部文学科言語学専攻卒業
- 昭和32年2月 東京教育大学文学部助手（～昭和37年3月）
- 昭和37年4月 N H K放送文化研究所員（～昭和39年10月）
- 昭和39年10月 千葉大学教育学部講師（～昭和41年8月）
- 昭和41年9月 千葉大学教育学部助教授（～昭和47年3月）
- 昭和47年4月 東京教育大学教育学部助教授（～昭和51年3月）
- 昭和51年4月 筑波大学教育学系助教授（～昭和51年10月）〈昭和51年10月まで東京教育大学助教授併任）
- 昭和51年11月 筑波大学教育学系教授（～平成7年3月定年退官）〈昭和53年3月まで東京教育大学教授併任）
- 昭和62年5月 筑波大学企画調査室員併任（～平成元年4月）
- 昭和63年4月 筑波大学大学院博士（教育学）等学位論文審査委員会委員（～平成5年3月）
- 平成2年4月 筑波大学大学院博士課程教育学研究科長併任（～平成5年3月）
- 平成5年4月 筑波大学附属小学校長併任（～平成7年3月）
- 平成7年4月 筑波大学名誉教授

・論文審査（筑波大学関係）

博士（教育学）学位論文審査（主査）5件，博士課程修士論文審査（主査）11件，修士課程修士論文審査（主査）20件

・非常勤講師（昭和40年度～平成6年度）

千葉大学教育学部に継続的に出講（昭和48年度～平成6年度）。その他，新潟大学大学院教育学研究科・同教育学部，上越教育大学大学院学校教育学研究科・同学校教育学部，東北大学大学院文学研究科・同文学部，埼玉大学教育学部，宇都宮大学教育学部，茨城大学教育学部，岩手大学教育学部，琉球大学教育学部，千葉大学留学生部，千葉大学文学部，金沢大学文学部，東京教育大学文学部等（年度順不同）に出講。

○学会活動等

日本国語教育学会常任理事

日本読書学会常任理事・日本読書学会会長

表現学会理事

大村はま国語教室の会理事長

全国大学国語教育学会常任理事・全国大学国語教育学会理事長

日本学術会議第一部教科教育学研究連絡委員会委員

文部省関係審議会専門委員等を歴任

○受賞等

昭和63年8月 全国大学国語教育学会石井賞受賞

平成4年11月 大村はま国語教室の会大村はま賞受賞

平成6年8月 日本読書学会読書科学賞受賞

主要著書・論文

I 主要著書（編・共編等を含む）

1. 国語科の特質と言語の機能（熊澤龍監修・湊吉正編『読解の到達点』明治書院，昭和48年5月）
 2. 国語教育論ノート，明治書院，昭和50年8月
 3. 国語教育の構造，言語指導論（倉澤栄吉・田近洵一・湊吉正編『教育学講座・第8巻 国語教育の理論と構造』学習研究社，昭和54年11月）
 4. 言語の諸相と言語体系一言語指導への方向づけのもとに―（湊吉正・桑原隆編『国語教育研究シリーズ12 言語教材編』桜楓社，昭和56年11月）
 5. 国語教育新論，明治書院，昭和62年4月
 6. 国語科教育の内容と構造（全国大学国語教育学会編『新国語教育学研究』学芸図書，平成5年11月）
 7. 国語科教育基礎論(2) 言語観〈編集・解説〉（飛田多喜雄・野地潤家監修『国語科教育基本論文集成』第2巻，明治図書，平成6年3月）
 8. 教育・言語・文学，湊吉正教授退官記念の会〈いなもと印刷〉平成7年3月
- その他

II 主要論文

1. 言語の諸相（『西洋文学研究―東京教育大学文学部紀要』第17巻，東京教育大学文学部，昭和33年3月）
2. 文体論の一方について―夏目漱石『明暗』における「外的連合喩」の考察を一つの実践例として―（『千葉大学教育学部研究紀要』第16巻，千葉大学教育学部，昭和42年6月）
3. 国語科教育学と言語理論―学の構造のスケッチ―（『国語科教育』第16集，全国大学国語教育学会，昭和44年3月）
4. 接続詞の境界（『月刊文法』第2巻第12号，明治書院，昭和45年10月）
5. 話しことば教育の本質（『国語の教育』第31号，国土社，昭和45年11月）
6. 話しことば教育の理想像を求めて（『日本語教育』第23号，外国人のための日本語教育学会，昭和49年3月）
7. 国語教育の新しい視野（『季刊国語教育誌』第12号，日本国語教育学会，昭和49年12月）
8. イギリスの国語科教育研究（『国語科教育学研究』1，明治図書，昭和50年11月）
9. 言語の媒介性について（今井文男教授還暦記念論集刊行委員会編『表現学論考』表現学会，昭和51年5月）
10. 作文の評価（林大・林四郎・森岡健二編『現代作文講座第2巻 作文教育の方法』明治書

- 院，昭和51年11月)
11. 国語科における評価のあり方 (『月刊国語教育』第2巻第6号，東京法令，昭和57年9月)
 12. 意味指導の方法 (『日本語学』第1巻第1号，明治書院，昭和57年11月)
 13. 表現研究と表現開発の授業研究 (『表現研究』第44号，表現学会，昭和61年9月)
 14. 言語の媒介性と国語教育との関連—「引用」の場合を通して— (『日本語学』第6巻第4号，明治書院，昭和62年4月)
 15. 言語表現の一特質に関する考察—所記・能記の相互媒介的機構— (『表現研究』第48号，表現学会，昭和63年9月)
 16. 言語環境の現代的状況と国語科教育の課題 I (『筑波大学教育学系論集』第13巻第1号，筑波大学教育学系，昭和63年10月)
 17. 話しことば指導の基礎的諸問題 (『月刊国語教育研究』No. 208，日本国語教育学会，平成元年9月)
 18. 国語科における表現力を育てる指導と評価 (『指導と評価』第436号，日本教育評価研究会，平成3年5月)
 19. 意味作用雑考 (『人文科教育研究』第18号，人文科教育学会，平成3年7月)
 20. 言葉と感性 (『教育研究』通巻1085号，初等教育研究会，平成4年7月)
 21. 言語研究と国語教育—国語教育学的言語論の成立のために— (日本国語教育学会編『講座ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開 I 理論編』東洋館，平成4年8月)
 22. 国語教育学の言語論的基礎づけに関する一試論—筆者のアプローチの歩みをふりかえって— (『筑波大学教育学研究集録』第18集，筑波大学大学院博士課程教育学研究科，平成6年10月)
 23. 言語感覚とは何か (『月刊国語教育』第14巻第12号，東京法令，平成7年2月)
 24. 現代における子どもの読むこと・読書 (『学遊』第7巻第7号，第一法規，平成5年7月)
 25. 授業における子どもの学習活動への探究 (『教育研究』通巻1117号，初等教育研究会，平成7年3月)
- その他